

## Ⅱ 日米協会主催「米国における英語研修講座」参加報告 (1)

### アメリカで考えたこと

松 本 青 也

#### まえがき

この研修旅行に出かけたそもそもの動機は二つあった。一つには自分の教えている英語がアメリカでどんな風に教えられているかを知りたかったこと、もう一つは病めるアメリカの実態をこの目で確かめたかったからだ。英語教育の分野では貴重なヒントを数多く得ることが出来たが、それはもう少し資料を揃えてから次号にまとめることにして、今回はアメリカの印象を簡単に述べておきたいと思う。

今にして思えば、二ヶ月の間、東から西へアメリカ大陸を横断しながら「日本でも……」と言い続けてきたような気がする。「日本では……」と言う場面は予想以上に少なかった。それ程アメリカは日本に、あるいは日本はアメリカに酷似していた。アメリカが病んでいるなら日本も病んでいるのだ。アメリカが偉大なら日本も偉大なのだ。ただアメリカの方は、あらゆる点で日本より一回りスケールが大きかった。そしてその幾分の相違が私に様々なことを考えるきっかけを与えてくれたのだ。

#### 1. 人種差別

##### 〈黒人恐怖症〉

How could you be so cold-hearted? (どうしてそんな薄情なことができるの) といいながら、しばらくの間後を追いかけてきて、やがて諦めて戻って行った黒人女性を振り返って、「いやあ、恐いですねえ、クロは。」と彼はほっとしたように言った。その日New Yorkに着いたばかりの私達は、連れ立って市内見物に出かけたのだが、Times Squareが分らず、近くに立っていた中年の黒人婦人に何の気なしに道を尋ねたのだった。彼女は道順を教えるとハンドバックから quarter (25セント銀貨) を取り出し、これを持っているかと彼にきいた。チップを要求しているのだと気付いた彼は、持っていないと答えたまま私をうながして彼女を振り切るように歩き始めたのだ。

「こわいですねえ、クロは。」と言われた私も全く同感だった。丁度白人が軽蔑的に黒人を nigger と呼ぶようにクロと呼ぶことにも何の抵抗も感じなかった。

そして、ふとしたきっかけで私の内面に出来上った黒人に対するそうした姿勢は、白人の大多数のそれと妙にぴったり一致していたのだ。

アメリカの感想は? と聞かれて私がお話をする度に、殆どの白人は大袈裟に頷いてから、なかにはいい奴もいるがと簡単に前置きをして、いかに黒人が愚劣で恐ろしい存在であるか、そしてあらゆる点での平等を唱えた最高裁の判決がいかに非現実的なものであるかを力説するのであった。

実際黒人の犯罪、だらしなき、卑劣さはいたる所で聞かされたしこの目で見もした。Washington D. C. では黒人達が昼間から porch (ベランダ) にだらしなく寝そべってビールを飲んでいたし、カメラを持った私を4、5人連れの黒人が取り囲もうとした時もあった。白人のバスガイドはもっぱら黒人による犯罪を強調し、この前も白人の夫婦連れがまだ九時半だというのにレストランから出たところを二人組の黒人に襲われて惨殺されたが、それを見ていた黒人達は警察に何も話そうとはしなかった。皆さんは暗くなってからは決して外に出てはいけぬ、などと忠告してくれるのであった。バスの窓から街を歩いている黒人——まっ黒な肌と丸くふくらませたちぢれ毛、らんらんと獣のような光を放つ目と平たくつぶれた鼻や分厚い唇——を見てみると、そんな警告が全く当然のことのように思われてくるのだった。同じ日本人同志でこそ見た目など二の次だと言えるのだ。顔から受けるイメージだけで私はすっかり黒人恐怖症になってしまっていた。白人にはその上、彼等は昔我々の奴隷だったのだという意識がまだこびりついているのだ。

高校で教えていた時、さっきまで黒人と話していた17才の女生徒に「どうだね、この学校では黒人と白人はうまくいっていると思うかね」ときいてみたら、彼女は顔をしかめてNo. とはきすてる様に言ってから、「だって昔は私達の slaves (奴隷) だったんですもの。」と付け加えた。こんなに若くて可愛い女の子が同じ人間を、それも机を並べて勉強している友達を slaves と言えることに大きなショックをうけながらも、理屈ではなく本能的に黒人恐怖症にかかってしまっていた私には何も言い返すことは出来なかった。

### 〈暴虐の歴史〉

Boston大学でも白人と黒人ははっきり分れていて、寮にあるカフェテリアでも黒人の坐るテーブルは自然に決まってしまうていた。ある日私は勇気を出して黒人と話してみようと思い、そんなに黒くはない女性の前に腰をかけた。アリガトという名前が丁度日本語の Thank you にあたるときいて驚いてから、すっかり話がはずみ、エチオピアから来たその女性は心理学を勉強している留学生で、将来は教師になるつもりだと教えてくれた。卒業してからここに残るのかときくと、「どんでもない、アメリカはもうたくさん。早くエチオピアに帰りたいわ。」という答がすぐはね返って来たが、その訳は尋ねるまでもなかった。

思えば1619年、初めてアフリカから連れてこられた奴隷も「アメリカはもうたくさん、早く故郷に帰りたい。」と思ったに違いない。そういう願いを全く無視されて、以後奴隷制度が廃止される1863年まで240年の間、7千万人ものアフリカ黒人が祖国からむりやり奪い去られてきたのだ。その上奴隷解放後も、N A A C P (the National Association for the Advancement of Colored People : 1909年創立、支部2000、会員50万、月刊誌 The Crisis を発行) の努力で最高裁の判決が出る1954年まで、彼等は学校から閉め出され、職もごく限られたものしかなく、土地を借りたり、買ったりすることさえできなかったのだ。白人の、黒人に対する暴虐の歴史は信じがたい程のものであった。

### 〈Poor Indians〉

インディアンもあわれだった。観光客を乗せたバスは Indian Reservation (インディアン 特別保留地) に入り、石造りの質素な平屋の間を砂けむりをあげて走り回ってから小学校の前で止まると、白人のガイドは我々を授業中の教室に案内し、国が建てたその小学校がいかにか設備がいいもので子供達が喜んでいるかを大声で説明し始めたのだが、授業を中断されても、邪魔をしないでくれとか出て行ってくれと言えないで呆然としている黒人の先生やインディアンの子供達のうつろな目がいかにもあわれだった。外に出てみると女性のインディアンが出てきてパイのようなものを大きな釜で作り始め、カメラを向ける人達にチップを要求するのだった。

バスの出発までもう少し学校を見ておこうと隣の幼稚園に行った私は、そこで大工として働いているインディアンと話をすることができた。彼は日本人と自分達は昔兄弟だったのだと言って私の肩を抱いてから、自分達こそが本当のアメリカ人なのであって、アメリカを発見したのは白人だと言うが、自分達はとうの昔

からアメリカがここにあることなど知っていたのだと冗談まじりに話しかけるのだった。そして一体この人達は何を生活しているのかという質問に、「農業とか、観光客相手の商売とか、私のように大工とか……とにかく profession (専門職) にはつけないんですよ。」と残念そうに答えた。

その昔インディアン達のものであった広大な土地を力づくで奪っておいて、今は彼等を人里離れた荒地に囲い、観光客相手の見世物にしている白人に対して、合衆国人口の0.3%にしかすぎない彼等は、自分達の怒りを冗談まじりに淋しくぶつけることしか出来なくなってしまうていた。

インディアンはおちぶれて貧しく、悲惨だった。

### 〈Racism の行方〉

こうした白人の身勝手な racism (人種差別) を「国内植民地主義」としてとらえ、その犠牲者である黒人を解放するものは、資本主義、植民地主義に対する武装蜂起による革命しかないとする Black Panther Party (黒豹党) の出現も、ある意味では当然の成行きであったかも知れない。しかし一方で黒人の都市集中化によって黒人の市長が出たことを契機に、黒人の間に正当な手段で自分達の権利を勝ちとろうとする意識が生まれてきたことに私は注目したい。白人の根深い偏見は、銃をつきつけられたのでは、ますます深まるばかりなのだ。大切なことは、メイフラワー号による上陸以来のあの神話化された白人中心の米国史を破り捨て、ありのままのアメリカ史を次の世代に教えていくということ、即ち、黒人やインディアンに対する暴虐の歴史を白人に、人間としての権利と尊厳を黒人やインディアンに教える教育なのだ。……アメリカにいる間中、心に重くのしかかっていたこの複雑な問題に耐え切れなくなって、東京に向かう飛行機の中で私はこう簡単に結論づけてしまっていた。それではお前が感じたあの黒人に対する生理的嫌悪感はどうなのだ、それにアメリカの体制自体が宿命的にはらんでいるこの問題がそんなに簡単に片付く筈がないではないか、という疑問をむりやり忘れてしまおうとしながら。

## 2. 個人主義

### 〈違うということ〉

「それでは日本人を描写するにはどうすればいいのですか。」ときかれて「そうだね、もっぱらサイズだね。」と答えるとクラス中に爆笑がおこった。それは目の色も肌の色も髪の色も日本人は皆同じなのだと話した時の質問だった。それ以来、もしこれほど各種多様な人間が日本に入ってきたらどうだろうとよく考え

たものだった。

まず日本人以外の人間とはなるべく距離をおくようにするだろう。お互いに固有の生活様式があるし、ものの考え方も違うのだ。私のことはほっとしてもらいたいという態度が強くなって、まちがっても今のように日本中が仕事でも遊びでも画一化されはしないだろう。本当の個人主義が芽生えて、そこに初めて本物の *privacy* が約束されるのだ。と同時に違っているからこそ努力して仲良くなろうとする為に、例えば会話を楽しくする *sense of humor* もみがかれるだろうし、*Thank you. Excuse me.* が気持ち良く出てくる礼儀正しさも生まれてこよう。

しかしそれは出来ない相談だ、一体日本でどれだけの距離を精神的にも肉体的にもとることができるというのだ。ヨーロッパ各国から殺到した多種多様な移住民がそうしたものを発達させることができたのは、そこが広大無辺なアメリカ大陸であったからなのだ。

#### 〈エスカレーターと階段〉

*Grand Canyon* で乗った観光バスの運転手は冗談の好きな男で、バスの中に、はえがいるのを見つけた私が、「アメリカでもはえをかつているのかね。」と言うと、すぐ、「It must be important, because we have many.」（きっと重要なものだろうよ。たくさんかつているんだから。）という答がはね返ってくるのだった。

その彼が5月まで高校で歴史を教えていたと聞いて驚いた。給料が悪いので教師を辞め、今は運転手として週6日みっちり働き、昔の3倍以上の稼ぎがあると自慢げに言うのである。もうしばらくそこで働いて、金がたまったらワイフと世界一周旅行に出かけ、旅先で次の仕事を考えるというのだ、私も先生だと知るといつまでやるつもりだと真顔で尋ねる。考え方がまるきり違うのだ。

日本の社会とアメリカの社会をエスカレーターと階段にたとえる人がある。日本ではじっと我慢して立っていれば確実に昇進していけるかわりに、その間は前後の人とびったりくっついて、いやでもつき合っていかなければならない。その点アメリカでは、自分の足の力で昇らなければならぬ辛さはあるが、階段を上り下りいつどちらへ進もうか勝手に、その為にも自分の考えを分かってもらえるように、それをはっきり他人に示すことが大切だというのだ。

確かにそんな違いをことあるごとに私は感じた。初めて出会った人から「お前さん月給はいくらだね。」と聞かれる度に、私は口ごもったものだった。日本円を素早くドルに換算出来なかったせいもあるが、自分の給料の額をそう軽々しく他人に言うべきでないとも

思ってしまうのだ。あるいは滞在先の家庭で夕食は何にしましょうかと聞かれる度に反射的に「何でもいいです。」と言ってしまつて奥さんをがっかりさせてしまうのだった。いつも周囲の人達とベッタリくっついていなければならない日本人には、言つてはならないこと、言わなくても分かってくれる筈のことが多すぎるのだ。

その点むこうははっきりしていた。タバコの箱にも **Warning : The Surgeon General Has Determined that Cigarette Smoking Is Dangerous to Your Health.**

（警告：公衆衛生局長官は喫煙が健康に悪いと断定しました）とはっきり書いてあり、日本人のように、あいまいのままにすまして、そつなくやっていくことが一番賢いやり方だというような考え方は比較的少ないようだった。その代わり、自分の人生を自分で切り開いていくのだという *frontier spirit* はまだ旺盛なものだった。そして、よし単純なものであれ、その為の人生哲学を各人が持っていたし、その為の金をいかにして稼ぐかに関心の大半はあるように思えた。

目的自体の良し悪しを別とすれば、欲しいものに向かって周囲の目などおこまいなしに自信を持って階段をかけ上がることのできるあけすけな卒直さとバイタリティーが幾分うらやましくもあつた。

### 3. 学校(アメリカの中学・高校)

#### 〈校長の1日〉

校長の *John Moyer* は *Missouri* 州立大学卒業後、軍隊に入り、二年間を南朝鮮で過ごした後、*Columbia* 大学の修士課程を経て年収1万2千ドルという *Plattsburg High School* の校長のポストに応募し、教育委員会の面接で採用された29才の独身男性だった。

*John* の一日は食事の用意から始まる。下宿住まいの彼は毎朝6時きっかりに起きて、ベーコンやレタスをはさんだサンドイッチとミルクで簡単に食事をすませると、7時にはもう学校に現われる。授業が始まる8時半までは書類の整理とか先生達との雑談。授業が始まると各クラスから連絡の入る生徒の出欠状況に目を通したり外部との連絡。伝達事項は授業中もおこまいなしに“*Attention please, . . . Thank you.*”とやらがす。11時から12時までは三交代で食堂にランチを食べに来る生徒達から、ひとことふたこと言葉を交しながら昼食代を集める。生徒の状況を知るにはこれが一番だと自分から進んで引き受けた仕事だ。12時から隣の部屋で先生達と冗談をとばし合いながら食事。「彼の話では、日本の校長先生というのは大変尊敬されているそうだよ。」と *John* が言うと“*Maybe they deserve it.*”（多分彼等はそれだけの値打ちがあるん

だろうよ)と音楽の先生がすぐにやり返す。大きなコップに注がれたアイステイーを2杯飲んだ頃には笑いすぎてお腹が痛くなる程だ。

先生が休んだりすると、それが家庭科でも体育でもおかまいなしに出かけて行って代わりに授業をする。その上生活指導はごくさいな事まですべてJohnに任されるのだ。やがて3時半の終業ベルが鳴って15分もすると生徒も先生も殆どいなくなってしまうが、Johnはパートタイマーの秘書と明日の打ち合せをしたり、残務整理をしたりして5時近くまで学校に残り、校内を見まわって鍵をかけてから学校を出る。途中スーパーマーケットに寄って買い物をしたり、親友でこれも独身の体育教師と一緒に外食したりして家に帰り、お気に入りのSonyのステレオをかけながらソファーにねそべって本を読んだり週末のゴルフのことを考えたりして一日が終わるのだ。

#### 〈教師の創造性〉

「彼に納屋を与えてごらんさい。2年後には立派な学校にしてしまうでしょう。」頭がきれて行動力のあるJohnのことを周囲の人はこんな風にはめる。確かに彼には「地域の人達からまかされてこの俺が学校を作っていくのだ」という情熱があった。そしてその熱意は「自分の授業は自分で作り出していくのだ」という各科の教師の創造意欲に支えられていた。校長も教師も新しいものを作り出していこうとする意欲に燃えていたのだ。

それを裏返して言うと、日本ではとかくおさえられてしまう教師の創造性を充分に発揮できる条件がアメリカにはあった。例えば、Plattsburg High Schoolの場合、Missouri州の法律で決められているのは次の様なことだけである。

『州文部省は、High Schoolを卒業する為には以下の17単元にわたる単位を修得することを要求する。

言語の3単元(言語1, 2, 3)

社会科3単元(公民, 世界史, 米国史)

数学1単元

理科1単元

芸術1単元

技術1単元

体育1単元

以上の他選択6単元

計17単元

』

これ以外の細かいことは一切学校に任されているのだ。Kansas Cityを中心いくつかの学校をまわってみたが、その教科内容、教科課程、評価方法等はそれぞれ全く違っていた。日本人的感觉で画一的にアメリカの学校では……とは、決して言えない程、実に多種

多様な学校を作る自由が現場に保証されているのだ。そして更に、日本にあるような入学試験が無いので生徒にいかに関心を持たせてやる気をおこさせるかという本来の意味での動機づけを求めて、教師が様々な方法を模索しなければならないという状況も、より良い授業に対して彼等をよりひたむきにさせていた。

そうした教師達の熱意にくらべて、彼等の労働条件は一見驚く程悪かった。州の法律で教師は1日300分以上の授業をしなければならないと決められているので、この学校の時間割は次頁のようなものだった。

しかしよく考えてみると、なるほど持ち時間週平均30時間は多すぎるが、生徒数が一クラス多くて20数名であること、雑務や課外活動の指導が一切ないこと、あるいは担任として膝を交えて語るといった生活指導的なものも無いなどの点では、日本の教師と比べて随分楽をしているのだ。教師としての生き甲斐の感じ方にも、日本流、アメリカ流があるわいと思ったことである。

#### 〈How to fish〉

Give me a fish, and I eat for a day.

Teach me to fish, and I eat for a lifetime.

(魚を一匹くれたのでは一日しかもたないが、魚の捕え方を教えてくれれば、私は一生食べていける。)

White先生のクラスに掲げてあったこの文句を読んで私は感心してしまった。文句そのものではなく、この精神がすみずみにまで徹底しているということにである。教師がすぐに知識を教えるのではなく、身近かなところからヒントをつかみ、それを手がかりにして自分達の手で真理を明らかにしていさせるその手際よさは心憎いほどのものであった。

例えばCommunicationについて教える場合、先生はまずどんな方法があるのかを皆に尋ねた。その後で犬が汗の臭いで自分を恐がっているのが分かるとか、赤ん坊は泣き声で気持ちを伝えるし、インディアンは指話で、谷を隔てた人は笛で話をするにつけ加え、それではCommunicationとは一体どんなことなのだろうと一歩進めるのだ。

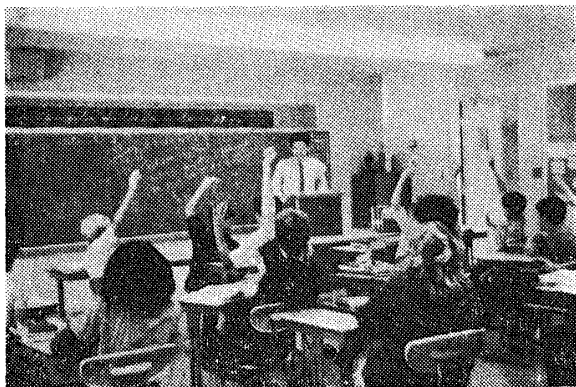
あるいは私の口ずさむ「出船」が別れの歌だと聞いた音楽の先生は、自分のクラスで私にその歌をうたわせてこれはどんな時の歌かときく。失意の歌とか、子供が死んだ時の歌とか、愛人と別れる時の歌だとか生徒にひとしきり言わせておいて、ではなぜ別れの歌だと分かったのかとつっこんでいくのだ。

そんなことを知らずに初日に教壇に立った私は、準備した資料をもとに日本文化についての講義を始めたのだが、何かひとこと言うとき誰かが黙って手を挙

Revised 8/20/71	1	2	3	4	5	6	7	
Wallace	World History	Sociology-1 7-8S Hall-2	Plan	World History	Civics	Contemporary Issues	Study Hall	
Pelzel	Audio-Visual	American History	American History	Plan	American History	American History	World History	
Rocha	Spanish I	Spanish II	Study Hall	Civics	Plan	Spanish I	Civics	
White	Plan	Speech	IA II	Speech	Dramatics	Journalism Lab	Journalism	
Kinder	LA III	LA III	LA III	Plan	7-2, 8-2 Study Hall	IA I	LA III	
Clark	LA I	LA II	LA I	LA IV	Plan	8-2, 8-3 Study Hall	LA II	
Myers	Functional Math	Plan	Algebra I	Study Hall	Algebra I	Math 7-3	Algebra II	
Kauffman	Plan	Functional Math	Study Hall	Geometry	Geometry	Math Analysis	Math 8-2	
Washer	7-1, 8-1 Study Hall	Biology	Advanced Biology	Biology	Biology	Study Hall	Plan	
McLain	Bookkeeping I & II	Study Hall	Plan	General Business	Business Law-2 Study Hall -1	Typing	Bookkeeping	
Shoemaker	Secretaria	Practice	Shorthand	Typing	Typing	Plan	Typing	
Bodde	Home Ec II	Plan	Meal Plan-2 Wardrobe Plan 1	Consumer Ed-1 Boys Home Ec-2	Home Ec I	Home Ec I	Child Devel-1 Home Manage-2	
Kirkpatrick	Drafting	General Shop	General Shop	General Shop	General Woodworking	Plan	General Woodworking	
Siddon		Building Trades		Plan		Building Trades		
Jones	Boys PE TTh Drivers Ed MWF	7-8 S Hall Drivers Ed-2	7th PE MWF 8th PE TTh	Boys PE TTh Drivers Ed MWF	Plan	Boys PE TTh Drivers Ed MWF	Boys PE TTh Drivers Ed MWF	
Shearer	Girls PE MWF Study Hall TTh	Girls PE MWF Plan TTh	7th PE MWF 8th PE TTh	Girls PE MWF Health TTh	Plan MWF Ellis TTh	Girls PE MWF Ellis TTh	7-3, 7-2 Study Hall	
Kiesling	Art I	Art II	7th Art TTh 8th Art MWF	Plan	Art III	Art I	Art I	
Gregory	Band	Chorus TTh	7th Music TTh 8th Music MWF	7-8 Band	Ellis	Plan	Chorus MWF	
Porter	Science 8-2	Science 8-1	Plan	Science 8-3	Science 7-3	Science 7-2	Science 7-1	
Corn	English 7-2	English 8-2	Plan	English 7-3	English 7-1	English 8-1	English 8-3	
Schmidt	Social Studies 7-3	Social Studies 7-2	Plan	Social Studies 8-2	Social Studies 8-3	Social Studies 7-1	Social Studies 8-1	
Elliott	Math 8-3	Math 7-1	Plan	Math 7-2	Math 8-1	Physics	General Science	
(COUNSELLER)		Psychology						
Rogers	Special Reading by Arrangement							

注：1 Planの時間は教材研究にあてられていた。  
2 ここでは7th, 8th grade が日本の中1 2にあたる。それ以上の生徒はFreshman, Sophomore, Junior, Senior と呼ばれる。

げるのだ。こちらが無視してもいつまでも手をあげているので、質問を受けないではられない。「日本について、皆さんはどんな事を知っていますか。」「ソニー。」「そう、ソニーとかトヨタは……はい、君」「どうして日本人は電気製品を作るのがうまいのですか。」「それは日本人は手先が器用だということと、もう一つは……はい、君何ですか。」「どうして日本人は手先が器用なのですか。」「……最初の授業は、そんな具合に、しどろもどろになったままベルが鳴ってしまった。



利用できるものは何でもタイムリーに利用してやるというのもアメリカの教師達の特徴らしかった。翌日の Speech のクラスでは、ひとり3分以内で私の授業についての感想を言わせるのだった。そしてひとり終わるごとに、その内容や話し方について全員で討論し、話を聞く際のノートのとり方、データーはどんな時に出す必要があるか、ポイントを話のどこに置くべきかなどという問題に発展させていくのだ。

視聴覚器材もフルに活用していた。例えば中学一年生に綴りを覚えさせる前に16ミリ映画を見せたのだがその内容が実にピッタリしていた。——綴りを覚えるのが嫌になった Alice という少女が夢を見る。夢の中で文字を殺してやるという人達とすっかり意気投合して仲良くなり言語学者とけんかを始める。そこでその言語学者は、なぜ人間に文字が必要なのかを分かり易く説明し始め、世界中の文字のあれこれやその起源などを面白く Alice に教えるのだ。Alice は文字と仲良くなり、一緒に踊ったり、綴りの順に並んで楽しく遊んだりする。そして夢から覚めた Alice はうれしくて早速綴りを覚え始めるというのだ。

一体我々は、受験の為に多くの魚を食べさせることばかりに熱心で、魚の捕り方を教えることを忘れてしまっているのではないだろうか。……彼等の見事な授業を参観するたびに、私はつくづくそう思うのだった。

#### 4. 若者たち

〈自由と規律〉

「教育委員会に言うのなら勝手にいいなさい。これだけ話してもあなたは自分の子供を control することがどんなに大切なことか分からないのですか。」John はものすごい剣幕だった。

ことのおこりは、高校生の一人がピンクに染めたアンダーシャツ一枚で登校してきたことだった。目ざとくそれを見つけた John が家に電話をかけて母親に上着を持ってくるようにいうと、今はあいにく外出できないと言う。そこで彼に上着を取りに帰らせたところ、5分後に外出できない筈の母親が学校にのりこんできて、ピンクのシャツがなぜいけないのかと John にくっつかかっていたのだ。

納得しないまま、憤然として帰って行った母親を肩をすくめて見送った John は、そこで居辛そうに坐っていた私に訴え始めた。「一番の問題は、学校が子供を control することを親が好ましく思わないことなんだよ。子供の言うことを何でもうのみにして妙にかんぐるだけなんだ。大体州の法律にしてもなっていないよ。どうしても生徒をなぐらなければならない時は adult witness (大人の目撃者) がいるというんだ。しかし考えてもみたまえ、すぐになぐってこそ効果があるんだよ、わざわざ大人を呼びに行行って戻って来てからじゃ、なぐっても何になるかね。Court reduced our effectiveness. (裁判所は我々の効果を弱めてしまったんだ。)」余程その生徒をなぐりつけたかったのか、John は珍しく興奮して話し続けるのだ。「しかし……」と言おうとして私は口をつぐんだ。居候の身分には日本人特有の遠慮がつきものなのだ。

Johnの言うことも分かるが、生徒指導を学校内と学校外で全く切り離している以上、それは仕方の無い事だった。学校内では遅刻や欠席に関して日本以上にうるさくても、それはその場限りのもので、一步学校を出れば生徒が何をしていても教師は一切口を出さないのだ。日本のように家庭での子供のしつけに学校が積極的に参加するという事は決してない。それ程親のしつけ方が腹に据えかねるのなら、この際家庭のしつけにまでのり出してみたらどうなのかねと言いたかったのだ。

実際、Johnの言うように学校以外の場で彼等は放任されすぎていた。それをつくづく感じたのは、高校生の dance party に招待された時だった。耳をつんざく様なゴーゴーのリズムにのって3曲ほど激しく体をくねらしていた彼等は、スローテンポの曲になると脇で見ていて止めようとする母親のいうこともきかずに明りを暗くした。そして女性が男性の首に手を回して胸に顔を埋めると、男性はその肩をしっかりと抱きしめてゆっくり踊り始めたのだ。一瞬私はわが目を疑った。暗い部屋でびったり抱き合ったままの高校生の男

女とそれを諦め顔で見ている母親……。それはどうにも信じられない光景だったのだ。確かに古い価値体系は崩壊した。今ではマリファナを吸っている生徒の方が、日曜日に教会へ行く生徒より多いともいう。が、しかし、いくらなんでも……。と言葉にならないとまどいを感じながら、私はボストン大学での光景を思いおこしていた。

大学生はもっとひどかった。すがすがしい朝、寮のカフェテリアに集まってくる学生達の前でソファーにねころんで抱き合っているカップルがいた。午前の3時や4時に一人で寮に帰ってくる女子学生もいれば女子寮に泊まり込む男子学生も多かった。驚いている私に、法律を勉強しているという Steve は「名前も知らない女の子の部屋に泊まって、お互いに名前を知らないまま別れるのも多いんだよ。」と教えてくれたし、「アメリカの男性とつき合うと1週間で必ず pill がいるんです。だから私は女性としか話しません。」という日本人の女子留学生もいた。そしてそんな時も、私は言葉にならない同じとまどいを感じていたのだ。

そのとまどいとは、常識的なモラルが全く通用しないその若者達を前にして彼等に納得のいく control とは何なのかを考えめぐっていた私自身の不確かさにすぎなかった。

文化には何らかの抑制がつきものだということはよく言われる。リンゴの実を枝もたわわに実らせる為には、余分な枝や葉を、いくらそれがリンゴの木には苦しいことであっても、切り取ってしまわねばならないというたとえもよく使われる。しかし従来若者に加えられてきた control は、彼等を人間として実らせたいという以外に、もっと様々な動機をはらんでいたのだ。日本を例にとってみても、軍国主義を徹底させる為の control や、学校や職場の中で、教師や管理者に都合がいいというだけの理由で考え出された様々な control もあった。力と富を自由にしている少数支配層の欲望を充足させる為に弱く貧しい多数に加えられた control もあったのだ。そして今でも確かにその名残りがここかしこに随分残っているのである。それはアメリカでも同じだ。

しかし今、その事実に気付いて自分達の為ではない control に反撥し始めた若者達も、そうされることで今まで大切にしていた道徳原理に裏切られ自信を失ってしまった大人達も、その混沌の中で、人間としての実りの為、そして又社会の一員である為にどうしても自分に与えなければならない control さえも忘れてしまっているのではないのだろうか。そしてその control が何であるかを明確にして、それを学校というワクをこえて積極的に次の世代に教えていくということ、それが我々教育者に与えられた今後の課題では

ないだろうか……。John と別れてから、私はそんなことを考えていた。

#### 〈日本でも……〉

歴史を教えている Pelzel 先生の家で月に2回夕食後開かれている歴史クラブの会合で、日本について何か話してくれと頼まれた私は、それが頭が良くて実行力のある生徒達、いわば校内でのエリートが集まるクラブと聞いていたので、日本の高校の生徒会や社研を連想して、きっと体制に対する鋭い批判が聞けるのではないかと楽しみにして出かけて行ったのだが、大きな応接間で私を待っていたのは、色あざやかな背広やドレスに身を包んだ、体格のいいにこやかな顔つきをした生徒が20人ばかりで、何か物憂げな青白い生徒、あるいはどことなく影のある黒人はひとりもいなかった。

さあ始めようかという先生の合図で、やおら全員が立ち上がり胸に手をあてて星条旗への忠誠を誓い始めた時には、驚くというより拍子抜けしてしまった。新聞に報道されるアメリカについていた見出しは、麻薬、反戦運動、ブラックパワー、ヒッピー、ウーマンリブ、ポルノ、それにエコロジー運動であった筈だ。アメリカはもっと病んでいて、それが為にもっと混乱している筈なのだ。私がそう言うところある学生が、日本こそすべての学生が毎日のように警官と戦っているのではないかと切り返してきた。なる程、新聞の報道というものはそんなものかも知れない。殆どの生活が平々凡々なもので news value が無い以上、殆どの生活は報道されていないのだ。彼等はベトナム戦争を止むを得ない戦いであり、日本こそ中国にあれ程近くにいなながら、共産主義の脅威を感じないのはおかしい。最大の関心事は正直に言ってしまうと、how to succeed in life ということだと言った。

それでは人種問題や麻薬問題をどう考えているのかと尋ねると、ブラックパワーはひとところより段々弱まってきているし、麻薬問題についてはベトナム戦争や人種差別が原因だというのは単なる口実で、本当は一種の流行なのだから心がけ次第で回避できるというのだ。彼等の楽観的、かつすこぶる単純な展望を耳にしながら、私は報道されるアメリカの後ろで、どっかと腰をすえている、いわゆる silent majority の卵を見る思いだった。アメリカのかかえている様々な問題に対して口先だけでなく、どんなことを実行しているのかという問いに対して、彼等がやれ自分にピッタリ合った運動がないとか、運動の効果自体が疑わしいから参加しないのだとか言い始めた時に、Pelzel 先生がこう言われた。「要するに彼等は苦勞を知らないのです。戦争の苦しさも知らない彼等は、ただ与えられるこ

としか頭に無いのです。人の為に自分を犠牲にして何かをしたり、愛されるかわりに人を愛することが出来ないのです。これは彼等が欲しがものを我々が何でも無条件に与えてしまった結果なのです。それともう一つ困ったことは、彼等の興味が多方面に分散してしまっていてどの一つにも集中できないということなのです。例えばこのRoscoe、彼にはフットボールとニューロックとデートがあるので忙しくてとてもそんな運動には参加できないのです。」そう言われた司会者のRoscoeはニコニコ笑いながら、「もう予定の時間を過ぎてしまいましたので、これで終わらなければなりません。」と言って皆を笑わせた。そして全員が次から次へ私に握手を求め、Thank you for coming. とか、I had a very good time. とか礼儀正しく挨拶をして帰って行った。

「これだから、」——私を家まで送り届けるために夜のハイウェイを飛ばしている先生に、私はひとりごとのように話しかけた。「これだから色々な運動がいきおい必要以上に否定的、反抗的になるのですね。コンピューターが冷たく支配する機械文明と軍国主義の行末に退廃と破滅の影を見てとった若者達が何を叫んでみても、大多数の者が適者生存のいわゆる「資本の論理」にこりかたまって how to succeed が最大のテーマだと言ったりするので、いきおい運動そのものが過激で anarchy なものになってしまうのですよ。もっとも彼等自身、もっと人間らしくと叫びながらもその理想を実現する具体的なプランを持っていないのは、結局さき程先生の仰った、ただ与えられることしか知らないということのあらわれかも知れませんが、こんな状況は全く日本とそっくりですよ。」ハンドルを握りながら頷いていた先生は「エッ、日本の若者もそうですって？」と驚いた様に振り向いた。そして又そこから「日本でも……」が始まったのだ。

### あとがき

Bostonで、ライシャワー氏と話をする機会があった。

「単一民族で単一文化を育ててきた日本には良きにつけ悪きにつけ、政治的にも経済的にも文化的にも島国根性がつきものなのです。日本は世界にもっと良く理解されなければなりません。色々な国際会議で日本人が黙っているのが不可解だといわれるのは、英語が苦手だという理由もあるのです。若い人達が、それで世界に自分を主張できるような英語教育をめざして下さい。」と言いながら、私がたまたま持っていた彼の *Japan, Past and Present* という本にサインをしてくれた気さくな氏のことを思い出すにつけても、私は英語の教師になってつくづくよかったと思うのだ。



おそらく私が触ったアメリカは象のお腹のあたりだけだったに違いない。しかしそれだけのものからでも私は予想以上に多くのことを学び取ることが出来たのだ。外国語を少しでも知るといことが、いつどんな形で未知の世界への扉を開く鍵になるのも知れないということがつくづく分かった今は、次の世代にそれを教えることで、これからの国際社会における彼等の可能性を大きくひろげてやる事が出来るこの仕事に生き甲斐を感じないではいられないのだ。

最後に、留守にした授業のすべてを担当して頂いた英語科諸兄のご助力と、Britannica Instituteからの多額な奨学資金がなければこの旅行は不可能であったことをここに記して深甚の謝意を表したい。

(まつもと せいや)